

2018.06 vol.4

Gno -info

Gnoble information paper



Topic



「オープンキャンパス」最盛期! 大学を知り、 学習意欲もアップ!!

オープンキャンパスで 大学の本当の姿を感じ取ろう

1学期も半分が過ぎ、間もなく夏休み。
勉強はもちろん、様々な計画を立てているのではないでしょうか。
そんな夏休みの計画に、ぜひとも加えていただきたいのが「オープンキャンパス」です。
「オープンキャンパス」は、大学を主に受験生対象に開放して、
大学の魅力を知ってもらうための一大イベント。
大学の指定日にキャンパスを見学しながら、現役の学生や講師が校内を案内してくれます。
受験生にとっては、ホームページやパンフレットだけでは分からない
大学の魅力に気づくことができる貴重な機会でもあります。
「オープンキャンパスに参加することで志望校が決まった」という学生も少なくありません。
大学がどんな場所なのかを体感するためにも、
また迷っている志望校を比較するという意味でも、有効的に活用して欲しいイベントです。

イメージとのギャップに悩まぬよう 入学後を想定した情報収集を

近 年、オープンキャンパスはほとんどの大学で実施されるようになります。高校生にとって必須のイベントとなりつつあります。もしかすると「既に參加したことがある」という方もいるかも知れません。しかし実際には、誰もが皆、オープンキャンパスを存分に活用できていたとは言えないようです。

というのも、「入学前に抱いていたイメージ」と「入学後のリアルな大学生活」とのギャップに悩み、楽しいはずの毎日には不満を感じたり、勉強が手につかなくなってしまう学生が少なからずいるからです。「興味のある分野をしっかりと学び、大学生活をエンジョイしたい」という希望があるて、「それが実現できるのは、この大学しかない!」という志を抱いて入学したはずなのに、何らかの理由で大学に馴染めないというのではありません。

そのような学生と大学のアンマッチが起こってしまう要因は、オープンキャンパスを初めとして、志望校を絞る段階での情報収集や、受験生個々の判断、自己分析力が不足しているという点だと指摘されています。

そこで今回は、オープンキャンパスを有効活用するためには、どのような準備、心構えで臨めばよいのかを確認していきます。



P.02-03

**「きれいな施設に感動!」
だけでは危険。
大学生活も左右する
オープンキャンパス**

**志望校選択は受験戦略の軸
色んな大学を肌で感じてみよう!**

**「やりたいこと」から考える
大学選び**

P.04

News Hotline

**見えてきた、
「大学入学共通テスト」の実施内容**

- 国語** 複雑な状況・情報を読み取り、判断する力を問う
- 数学** 解き方まで考察させる応用的な問題が登場
- 英語** 実際に使える力を重視

グノーブルの個別指導 グノリンク

四谷校 新規開校

GnoLink 個別指導 グノリンク

※詳細はホームページまで

四谷駅
3分

OPEN CAMPUS

「きれいな施設に感動！」だけでは危険。 大学生活も左右するオープンキャンパス

事前の予習が決め手。 “知る”場より“確認する”場に

受験生にとっていまや参加するのが当たり前になったオープンキャンパス。夏休み期間を中心に開催する大学が多いことから、既に参加の準備を進めている高校生も多いことでしょう。

オープンキャンパスでの一般的な内容といえば、大学トップの講演・挨拶や各学部・カリキュラムの紹介、キャンパス内の施設見学ツアー、体験講義、入試に関する説明などです。ボランティアの学生が多く手伝う大学では、少人数でのフランクな雰囲気の中での質疑応答や、サークル活動の紹介などを行う大学もあります。高校生にとっては、最新の施設や歴史を感じさせる重厚な建物、大学ならではの華やかで明るい雰囲気に、一気に気分が高まります。

充実した内容で大学の様子がよく分かるようにも感じますが、参加した学生からは「もっとオープンキャンパスでこんなことも聞いておけばよかった」という声が少なからず聞こえています。また、入学後に「イメージしていた授業と違った」「きれいな校舎だと思ったら違う学部が使う施設だった」など、事前の

情報収集不足やオープンキャンパスをうまく活用できていなかったと反省する学生も少なくありません。

そもそものはずで、大学にとってオープンキャンパスは、多くの受験生に志望してもらうために大学の良い面を紹介する場です。施設見学では最新の教室を見せ、体験講義には人気教授が登壇するということは珍しくありません。受験生もそれを見越した上で、あくまでも見えているのは一面という認識のもと、積極的に質問することが、大学の本当の姿を知るために重要です。そのためにも、オープンキャンパスの場で初めて大学のことを知るのではなく、特に志望度の高い学校ほど、実際に自分が通い、学んでいる姿をイメージして情報を集め、気になった点をオープンキャンパスで確認するつもりで参加すると、より自分自

身に必要な情報を手に入れることができるでしょう。

聞くべきことは自分次第 一般的な質問より素朴な疑問を

オープンキャンパスで何を確認し、何を質問するべきかは重要なポイントで、インターネット上でも様々な情報がまとめられています。

大きく分ければ、①入試対策、②教育内容、③大学生活の3点に分けられます。その3点を質問例にしたがって確認したから十分ということはありません。あなたが大学に何を求めるのかによって、確認しなければならないことはもっと変わってきます。

例えば、就職先や資格の取得可否を重視する人は、その実績や大学のサ

ポート体制など、実際に同じ目標を目指している学生の声を聞くことで、実態が見えてきます。

また、学びたい分野が明確に決まっているのであれば、その分野が本当に志望している学部で学べるのか、どのような専門性を持った先生がいてどのような授業をしてくれるのか、他の学部でも似たようなことを学べるのかなど、具体的に確認する必要があります。

学習面はもちろんですが、サークル活動や部活動、アルバイトなどで幅広い体験を重ねたいということであれば、直接学生に聞いてみることも有効でしょう。

オープンキャンパスの限られた時間の中で、大学・学部選択の有効な指標を得るためにには、何を基準に、どのような点を重視して大学や学部を選ぼうとしているのか、明確ではなくとも、自分自身の意志を再確認しておくことが不可欠です。

自由に質問できる場として、学生や進路アドバイザーとの質問会などが開催されることがあります。そこではかしこまった質問をしようと頑張る必要はありませんので、その大学に入学したつもりで、素朴な疑問や不安を遠慮なくぶつけてみましょう。



志望校選択は受験戦略の軸。 色んな大学を肌で感じてみよう！

見学でモチベーションアップ！

オープンキャンパスに参加する受験生の中には、現在の成績に見合ったレベルから、見学する大学を選択する生徒は少なくありません。しかし、特に高校1・2年生はもちろん、高校3年生であっても、まだこれからの学習次第で成績は大きく変わることがあります。学習のモチベーションを上げる意味でも、難関といわれる大学のオープンキャンパスに参加

してみると、学生スタッフに触発されてモチベーションが上がるかもしれません。

また、高校3年生にとっては、夏休みは時間があるからこそ、勉強に集中できずにだらけてしまう生徒もいるでしょう。そんな時には、すでに昨年行ったことがあったとしても、もう一度志望大学のオープンキャンパスに参加し、大学生の様子を見て、改めてモチベーションを上げるきっかけにするということも一手です。

リアルな大学は 通常授業の見学で体感

もしオープンキャンパスに日程などの面で参加できなかった場合には、他の日に直接見学に行ってみるという方法もあります。中には、夏休み中のオープンキャンパスよりも普段の大学の雰囲気を感じたいと、通常授業の期間中に直接見学に行く生徒もいます。

多くの大学の場合はキャンパスに入ること自体に許可はりませんし、守衛がいる場合も受験生で見学したい旨を一言伝えれば入れてくれる場合が多いようです。最近はホームページで自由見学が可能かどうか、申込みが必要かどうかを明示してくれている大学もありますので、まずは各大学のホームページをチェックし、不安であれば連絡をしてみると良いでしょう。

様々な施設を案内してくれるオープンキャンパスとは違い、入れない場所もあるでしょうが、学食や生協、周辺の街など、学生が集まる場所を歩いてみると良いです。その大学の学生たちの雰囲気をつ

平上先生の 見解・アドバイス



中学受験をされるご家庭の場合であっても、普段の学校生活を見ることができるオープンスクールや文化祭などの見学を通してお子さんが6年間通うことになる環境をリサーチしておくことは大切です。お子さんといっしょに見に行く場合は、勉強が忙しくなる前の4年生のころからが良いと思います。

また、たとえ保護者の方のみが説明会などに行ったとしても、ぜひその内容、感想をお子さんに伝えてあげてください。ご家庭内で（なんとなくではあっても）「中学受験をして○○中に行く」という雰囲気、意識がある場合とそうでない場合では、本人の学習に対する意欲が異なってきます。

（中学受験グループ：広報担当）

大学ごとにルールや特典。早めの確認を

大学にとってオープンキャンパスは受験生をいかに集めるかという点でとても重要なイベントです。そのため、一部の大学では交通費の補助や駅からの無料バスを用意したり、中には受験生に加え保護者1名分まで補助するという気前のいい大学まであります。また、受験生を集めるためにプリペイドカードや大学グッズ、受験料の割引券など様々な参加特典が用意されている場合もあります。様々な支援をうまく利用することで、あきらめていた遠方の大学見学もできる

かもしれません。

一方で、人気大学では見学者が増えすぎてしまうことから、個別の体験講義やオープンキャンパスの参加自体に、事前申込制となる場合があることには注意が必要です。また、中には夏だけではなく秋・冬に、模擬試験＆解説講義など、より入試を意識した内容でオープンキャンパスを実施する大学もあります。それぞれの大学のホームページなどを確認し、無理のない範囲で効率的に参加計画を立てましょう。

かむことができます。また、個人見学の場合であっても、事務室やキャリアセンターなどで大学案内などをもらうことができます。

さらに、もしその大学に通っている知り合いや先輩がいるのなら、直接話を聞いて疑問をぶつけてみるのも有効でしょう。人気のゼミや先生、授業の様子などはもちろん、サークル活動や周辺の環境のことなど、オープンキャンパスでは出てこないような話題も聞けるかもしれません。

「やりたいこと」から考える大学選び

名前だけでは決められない 大学・学部の違いを 読み解くポイント

オープンキャンパスに参加したことでも「こんな領域の学びがあるのか」「こんな専門家を目指したい」と、目指すべき方向性が見えてきたという生徒は少なくはありません。

しかし、既に学びたい分野や進みたい方向性を決めている生徒の場合には、情報収集に時間を費やすよりも、勉強を頑張り偏差値を上げることに集中する生徒もいることでしょう。

早い段階でやりたいことを決めるこども、受験勉強に集中することも大変良いことです。ただし、大学・学部選びに関しては注意が必要です。

例えば一言に「グローバルで活躍できる人材を目指す」と言っても、その「グローバル」に対する解釈は大学によって様々です。進路の選択次第では、入学してみたら思い描いていた授業ではなかったということにもなりかねません。一見似たような言葉で同じ領域に見える学部だからと言って、安易に偏差値の高低だけで志望大学を選択してしまうことは危険です。

そこで、大学や学部の差を読み解くためのいくつかのポイントについて、事例をもとに考察してみます。

Point 1 「グローバル」な大学とは? 抽象的な学部名に注意!

昨今、「グローバル」を冠した新たな学部・学科を開設する大学が増加し、人気を集めています。しかし、一言に「グローバル」と言っても、その学びのスタイルは様々です。

例えば、英語力を身に付けようと、留学支援に積極的に義務化を図る大学や、反対に留学生を招いて共に学ぶ大学、4年間の寮生活を留学生と同部屋で暮らす大学などがあります。

一方で、「グローバル」な人材を英語力だけとは考えずに、語学教育に加えてリーダーシップや哲学、政治といった幅

広い教養を身に付けさせることを志向する学部も存在します。

あなたが目指す「グローバル」とはどのようなイメージでしょうか。幅広く解釈できる言葉だけに、具体的な学習イメージを持って、各大学のカリキュラムを確認し、オープンキャンパスで質問してみるとが、入学後のアンマッチを防ぎます。

Point 2 経営学部・商学部だけではない 「ビジネス」を学べる 学部とは?

将来のなりたい職業や目指したい業種、起業したいという思いなど、ビジネスの世界で活躍する姿を既にぼんやりとも思い描いている学生は少なくはないでしょう。そんな意欲の高い学生をさらに磨いて社会に送り出すべく、大学も様々な形でビジネスを経験できる場を提供しようとしています。

例えば、近畿大学水産研究所の「近大マグロ」のように大学の研究成果を企業が活用してビジネス化する取り組みや、研究段階から企業や行政が金銭的な支援を行う産学官(企業・大学・行政)連携のプロジェクトは近年注目が高まり、国や経団連も積極的な姿勢を示しています。

また、起業を目指す学生に対しては、様々な分野の専門家とつなげることで法律相談や公的資金、金融相談などのサポートをしてくれる大学があります。大学・大学院発のベンチャー設立は一時期のブームののち、不況のあおりを受け衰退ましたが、近年また産業界の発展に欠かせないとして、支援に力を入れる大学が増えているのです。

他にも、ゼミへの社会人講師の招聘や社会人学生の積極的な受け入れなど、ビジネスとの接点を増やすことで学生の視野を広げようという取り組みは様々です。大学は座学で学問を修めるだけの場ではなくなりましたし、ビジネスの世界を覗けるのも、決して経営学部や商学部だけではないのです。

目標とする職業が明確な生徒は、実際にゼミの様子や授業の内容、大学側の支

援や特徴的な学生参加プロジェクトを探してみると、自分にとっての良い大学・学部が見つかるだけではなく、自分自身がやりたいこともより見えてくる機会になるでしょう。

Point 3

「研究力」がある大学とは? 大学ごとの専門性にも注目!

理系を目指す学生には、優秀な先生についてじっくりと研究を重ねる道を選択する人がいます。

一般的に研究力が高い大学と言えば、東大や京大といった、国からの補助金が豊富な旧帝大が思い浮かべられます。実際に研究力の一つの指標になるノーベル賞受賞者の数や論文の数でそれらの大学は上位に入りますし、潤沢な資金力をもとに充実した施設を誇ります。

ただし、研究の道は国立大が完全に優位かと言えば、一概にそうとは限りません。大学ごとに得意とする分野や教授の専門領域が異なるためです。特に近年は日本の科学分野の研究力が落ちてきたと評価されていることを国が問題視し、もっと多様な大学の研究を後押ししようと、文部科学省が様々な支援策を推進しています。

例えば、地方私大の久留米大学は医学系の研究が盛んで、がん研究に関しては「先端癌治療研究センター」が平成8年に文部科学省の「私立大学ハイテク・リサーチ・センター整備事業」の支援を受けて設立され、以降、外部資金を得ながら様々な事業、プロジェクトを推進し、高い評価を得ています。

また、研究と言うと真っ先に理系を思い浮かべがちですが、文系にも研究分野はあります。法政大学では総長の田中優子氏が「江戸文化」の研究者であるように江戸文化の研究に強く、昨年度の文部科学省「私立大学研究プランディング事業」に採択され、江戸東京研究センターが発足しました。

このように、国立大ではなくてそれぞれの専門分野においては高い研究力を發揮している大学は少なくはありませんし、文系においても研究に力を入れ、外部か



吉田先生の
見解・アドバイス

オープンキャンパスはできるだけ高2までに。高3の夏は講習・模試も多く、勉強自体に時間を割かなくてはなりませんし、推薦入試を受ける場合、夏にはもう志望理由書を準備しなくてはならない大学もあります。高1までは自分の興味関心を探りがてら、高2では、自分のやりたいことをどこで叶えるかを比較検討するという狙いで参加できると良いですね。なお、大学を知る手段はオープンキャンパスだけではありません。大学の広報、研究室・サークルなどがウェブ・SNSの情報発信をしている例も増えています。受け身にならず、自ら情報を取りに行く姿勢で臨みましょう!

(大学受験グノーブル:国語科担当)

らの支援を得ている大学もあるのです。

自分の興味がある分野について専門的に突き詰めてみたいと考える受験生は、単純にイメージや過去の実績だけでなく、大学ごとにどのような研究に力を入れているのか、どのような先生がいるのか、国や企業からの支援を受けられるのかなど、幅広い視点で情報を集めてみると、意外な大学との相性が見えてくるかもしれません。

Point 4

人気や偏差値はあくまでも 一つの指標 自分にあった大学選びを

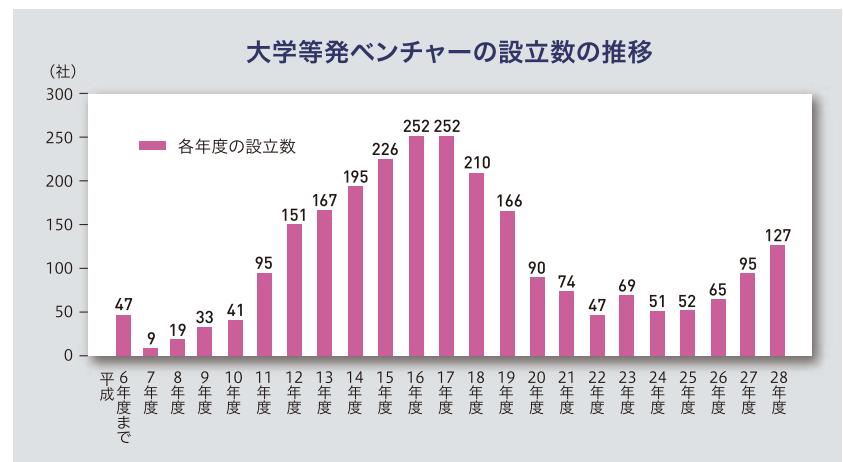
大学選びは、ともすると友人や周りの評判・意見が気になったり、偏差値の微妙な優劣を気にしてしまがちです。しかし、一番重要なことは、周りからの評価以上にあなた自身が高いモチベーションで長期間学べる場所かという点です。

自分自身の将来の道にも影響を及ぼす分岐点であり、毎日過ごす場所だからこそ、自分なりに気になる点は納得いくまで聞くことが重要です。その際に調べるべき情報、聞くべき質問は、受験生個々に異なることを忘れてはいけません。

オープンキャンパスは夏休み期間がメインのイベントとはいえ、貴重な勉強や生活の時間を割くからには、事前の準備、特に自分自身の志向の整理をしっかりとした上で、臨むようにしましょう。



参考:「平成28年度 大学における産学連携等実施状況について」文部科学省



参考:「平成28年度 大学における産学連携等実施状況について」文部科学省

News Hotline

見えてきた、「大学入学共通テスト」の実施内容 共通テストの試行調査結果が公表

現行の大学入試センター試験に代わって、思考力や判断力、表現力も問う「大学入学共通テスト」(以下、「共通テスト」と表記)が2020年度から始まります。国語や数学において記述式問題が導入されるほか、英語では現在の「読む」「聞く」に加えて「話す」「書く」能力も測る4技能試験になる方針が昨年発表されました。その共通テストの試行調査が、17年11月(国語・地理歴史・公民・数学・理科)と18年3月(英語)に実施され、その内容や正答率などの検証結果が出揃いました。

記述式に苦戦する学生も。 今後さらに検討・修正の方針

一連の報道では、特に記述式への低い正答率に対して、設問の内容や共通テス

ト自体への賛否の論評が見受けられます。しかし、実施主体の大学入試センターは「今回の試行調査で出題された問題の構成や内容は、必ずしもそのまま20年度からの大学入学共通テストに受け継がれるものではなく、今回の試行調査の解答状況等の分析を踏まえて検討されます」と表明している通り、今年11月に実施される第2回試行調査も含め、本番の20年度までにさらに検討・修正されることになっています。

つまり、今回の試行調査の内容・難易度や結果に一喜一憂し過ぎる必要はありません。それよりも、どのような問題が出題されそうなのか、その傾向を捉えることが重要です。ここでは今後の学習の参考として、注目の記述式問題や英語の4技能試験における出題の狙いや問われている資質・能力を紹介します。

国語

複雑な状況・情報を読み取り、判断する力を問う

生徒会の会話文をもとに、長短3問の記述式問題を出題

国語では大問5つのうち第1問において、25文字以内の短文形式から、80字以上120字以内の長文まで3つの記述式の問い合わせが提出されました。設問は生徒会の部活動規約に則り、執行部会が委員会に提出する議題について検討している様子をもとに、補足資料から執行部各自の主張や要望を読み取るという内容です。

中でも、「確かに」「しかし」といった文章の書き出しと、補足資料から読み取った根拠をもとに副委員長が考えているであろう論旨を80字以上120字以内で展開することが条件づけられた問3は、完全正答率が0.7%と非常に低い結果になりました。これに対し、作問責任者は「どこまで複雑な問題が可能か調べたかったので、難易度が高くなつた」とコメントしています。

マークシート式でも論理的な思考力を問う問題

大学入試センターでは第1問について、「現代の社会生活で必要とされる実用的な文章」を題材にすることと、「話し合う場を設定し、複数の資料を用いることにより、テクスト(会話文)を場面の中で的確に読み取る力、および設問中の条件として示された目的等に応じて思考したことを表現する力」を問うことが狙いであると説明しています。

また、マークシート式の問題においても、街づくりに関する論文や図表を読み取って解答させたり、あてはまる選択式を全て選ばせる問い合わせが提出されたように、問題全体を通して、知識だけではなく、多様な情報や文章から状況を把握し、論理的に判断する力が求められています。

国語・数学の正答率と無解答率

国語(字数制限)	完全正答率(%)	無解答率(%)	数学(分野)	正答率(%)	無解答率(%)
問1(50字以内)	43.7	2.3	問(あ)(2次関数)	2.0	49.8
問2(25字以内)	73.5	3.0	問(い)(三角比)	4.7	57.0
問3(80~120字)	0.7	6.6	問(う)(散布図)	8.4	46.5

参考：朝日新聞(平成30年3月27日)

数学

解き方まで考察させる応用的な問題が登場

数学も日常生活から出題

数学では、大問5つのうち、第1問で2つ、第3問で1つの、合計3つの記述式の問題が出題されました。

第1問では、2人の学生が授業の場面で二次関数や三角比の問題を相談しながら説いている様子を読み取り、設問で与えられた条件に応じて、解答を求めるための考察の流れや根拠を、数式などを用いて説明する力を測る問題が出題されました。

また、第3問では都道府県別の観光客数や消費総額などのデータをもとにした散布図などを活用して、消費額単価が最も高い県を表す点を特定する方法を記述させてています。

正解が何か、よりどう解くか

いずれの問題も、「単に計算によって式や数値を求める問題とはならないよう工夫」され、「論理的に推論」したり「データの特徴を読み取る」という思考を経てから「数学的な表現を用いて説明する力」を問うことが狙いだと、大学入試センターは解説しました。

その他のマークシート式問題でも高速道路の交通量を考察させるなど、あくまでも数学の基礎的な知識をベースにしながらも、その知識を日常生活の様々な場面でどのように引き出し、使うことが出来るのかという応用力がより問われています。

英語

実際に使える力を重視

日常生活を想定した設問 単語数も増加

試験調査で実施された英語試験は「リーディング」と「リスニング」です。いわゆる“4技能”的うち「読む」「聞く」の2技能を測る問題が出題され、思考力や判断力を問うスタイルに変化しました。

例えばリーディングにおいては、状況や情報を正確に読み解いた上で、「概要や要点を把握」したり、「情報を事実と意見に整理」する力、「筆者の意見を把握」する力などを問うことを狙いとしています。

そのため設問には、遊園地の混雑予想や、飲食店の口コミサイト、授業のディベートに向けた準備など、実際の日常生活で想定される場面を設け、単語は平易であっても、ある程度の情報量を読ませる問題になっています。これにより、センター試験と比べて設問数は減っているにも関わらず、単語数は約2割増えました。

文法の短文問題は消滅

もう一つの大きな変化は、短文問題が無くなつたことです。センター試験では

“4技能”の中の「話す」と「書く」力も測るために、単語の発音やアクセントの位置、単語の並び替えを答えるような短問を20~30問出題してきましたが、今回の試験調査では全く出題されませんでした。

これについて大学入試センターは、「話す、書く力は民間試験で測る」ことを表明していますが、「必ずしも(本番の)共通テストを短問抜きで行うとは限らない」とも主張しています。

実際の会話場面を想定した リスニング

リスニングでは、センター試験では音声を2回流すところを1回に減らす、米国英語だけではなく英国人や英語を母国語としない人が読み上げるなどの工夫もされました。受験した学生からは「聞き取れない」「難しい」という意見も挙がっていますが、民間試験でしっかりと測る「話す」「書く」力も含め、基礎的な英語力を生活の場面でいかに発揮できるのかという、使うための英語力を問う方針に大きく転換させようという意図がはっきりと見てとれる試験調査になりました。

Editor's Memo

今号の主題には、今や受験に向けた活動の一つとして欠かせなくなったオープンキャンパスを取り上げました。受験生にとっては「既に十分に知っている」と感じていた学生も多いかもしれません。しかし、「十分に活用できているかどうか」は、誌面で述べた通りです。筆者自身、大学時代にはいつの間にか休学や中退をしており、留年を重ねてしまう友人がいました。一人でも多くの受験生が心から納得し、楽しく学べる大学選び進学することを願つてやみません。